21世紀におけるコミュニケーション

ヘンリー・グラッシー
（高原 隆・訳）

※本稿は1998年6月6日国際コミュニケーション学部開設記念講演に基づき増補改訂したものです。

西暦2000年即ち新千年期の到来は私たちに立ち止まって考えることを喚起しています。つまり我々は過去にさかのぼって評価するように鼓舞されたのかもしれないのです。その理由は我々が過去について何かを知ることができるからなのです。一方，進歩ということに熱中している人々は未来について語ろうとして将来を考えることを選ぶのです。未来については我々はいろいろ述べることはできますが，何も知ることはできません。

私は「21世紀におけるコミュニケーション」について話すように依頼されています。私はこの課題を承諾したのですが，聞くところによれば，フランスのある路上でジャン・ジャック・ルソーと共に始まったというある特別な西洋の伝統のなかで振る舞っている私に気がついています。進歩についての問いに答えようとしていた時，ルソーは「進歩は人間に利益よりも有害なものをもたらしてきている」という有り得ないような思想によってひどい一撃を受けたのです。私の課題はテクノロジーの進歩という観点からコミュニケーションについて考察し，さらに総ての人々が一つに結びつけられ，驚くべき新しい機械がコミュニケーションを進歩させるという未来を描くことであろうかと思います。ところが，私はコミュニケーションは現在下り坂にあり，新しい時代のコミュニケーションは悪化することはあっても，良くはならないと思っています。いずれにせよ歴史にパターンを探す以外，未来を想像する方法は他にないという興味ある批判的な立場なのです。私は「コミュニケーション」を定義し，「コミュニケーション」を描写することから始めたいと思います。

コミュニケーションとは繋がりをもたらす交換，やりとりのことです。それは会話における親密な出会いにもっとも典型的に示されています。人々は出会って，話すのです。

場面は田舎です。ある田舎道が淡く青みがかった緑の丘の麓を走っています。低く灰色の雲が空に広がっています。空気は冷たく，湿っています。パディは鉈がまを持って道沿いの生け垣を刈り込んでいます。トミーが黒い自転車をこぎながら左手からやって来ました。「日が悪いよ」とトミーは挨拶しながら言います。

「そうだね。本当にひどい」とパディは応えます。

二人は農夫です。天候の評価は彼らの生活に欠かせません。天候に同意しつつ，二人はこの季節に何をしなければいけないか合意するのです。トミーが立ち止まります。彼らは背を西風に向け，トミーはパディに煙草を渡します。トミーのコートを風よけにして，パディはマッチをパチッと鳴らし，二人に火を点けます。「今日，町でニュースあった？」とパディがたずねます。

「別に」とトミーが言います。

その日は牛の市がある日でした。トミーは自転車に乗って町へ見に行ったのです。彼の答えはパディに牛の価格に変化がないことを告げているのです。そして牛を売ると二人にはわずかながらの現金が手に入るわけです。

「ジェイムズは家にいる？」とトミーは訊きます。

「うん，居るよ」とパディは答えます。並んで濡れた生け垣を見ながら立っています。風が煙草の煙を東へ吹き流しています。「あんたのとこの彼奴の牛は良くないんだろ」とパディが言います。

「うん。――あれは，ああなのさ」とトミーは応えます。二人の煙草がなくなり，トミーは自転車のハンドルを握って，動きだし，「じゃ」と言うのでした。

「じゃ」とパディは答え，彼のごつい手に鉈がまを持って生け垣に再び向かうのでした。

ほんの少し語り合いながらも多くの事が起こったわけです。二人は一緒に共同体の安寧を測ったのです。ジェイムズが家に居ることは彼がまだ病気であり，近所の人々はすぐに集まって彼の庭を耕す必要があり，そうすれば彼は来年食料を手に入れることができることを意味しているのです。ジェイムズは彼が必要なときには手助けを受けられる良い人なのです。無名のままの男は過去，近所の人を手伝うことを拒んだことがあったのです。彼の牛は食べ物を欲しなくなっているのです。彼のことは取り上げられたのですが，二人は彼のために手伝いはしないことにしたのです。そして収入源である牛を一頭一頭死なせることにしたわけです。

情報を交わしながら，煙草を交換にマッチを点けてもらい，一緒に煙草を一服し，一休み

しつつ，二人は自分たちの繋がりを確認したのです。彼らの会話は誰が属しており，誰が属していないかをはっきりさせながら，彼らの共同体を強化したのです。言葉や行動で，彼らは二人が大きな共同体の一部であることを認めたのです。各自が他の人を助ける用意をしているのです。二人の数少ない言葉はお互いに分かち合っているある倫理観の理解に依存しているわけです。

旧友が出会うと，たくさんの出来事をあれこれ言う必要はないのです。文化を構成する経験を共有しており，社会関係が形成される文化を共有しながら，旧友はわずかな言葉をコミュニケーション，即ち，繋がりをもたらす交換，やりとりに変える，密度の高い独立した心の中の応答に頼れるのです。交換について，重要な問題を本格的な考察のために立てることができます。

普通のコミュニケーションの本質はサミュエル・ベケットによって最も良く捉えられています。20世紀で最も重要な劇である『ゴドーを待ちながら』を読むと，二人の旧友が道で出会います。ヴラディミールとエストラゴンはパディとトミーに似ています。しかしパディとトミーが話すわずかな言葉は語られないままなのです。反対にベケットは苦悩に満ちた心の中の沈黙の応答の複雑さ——単純なメロディーのような言葉の表層を伴う熱烈な音楽のようなもの——を大声で二人に語らすのです。

『ゴドー』は何事も二度は起こらない劇であるという機知に富んだ注釈はまさに総てのことを曖昧にするのです。見知らぬ人たちが二度訪れる間に，旧友たちは支配と服従に基づく階層社会関係の急激な崩壊を目にするのです。二人がゴドーを待ち続けているので，天使のような少年がゴドーの存在について二人に証言するのです。二人の旧友は待っている間に，一緒に留まって，つまずいたり途切れたりするコミュニケーションが創る繋がりを維持することを決めるのです。

昔なじみの友達が交わす普通の会話では，わずかな言葉と豊かな応答によって，社会との掛かり合いへと導かれます。彼らが会話のエネルギーをより優れたものへと高めると，彼らの創るものは無限ではないのですが，豊かな応答の領域を形作る抽象的な構造を保つのです。彼らは我々がフォークロアと呼ぶ芸術的な作品を生むのです。民話には心理的な詳しい描写や，脇道にそれるような描写や，イデオロギーの強制は存在しません。物語は幾何学的に展開します。最小限に特徴を描写された人物が無描写な風景を横切っていき，一方，聞き手は各自の結論へと至るのです。聞き手は語り手を知っているのです。語り手は自己顕示的な誇示を必要としません。語り手のパーフォーマンスは個性に溢れています。語り手は聴衆を知っており，聴衆の経験を共有しているのです。語り手は聴衆に丘がどのようなものかとか，家がどういう風なのかなどと語る必要がないのです。語り手は聴衆と価値観を共有しており，事件の事実の簡素な紹介から正しい判断を導くのに聴衆の持つ価値観に頼ることができるわ

けです。

旧友たちは道で出会い，一緒に煙草を一服し，二人の繋がりを確認するのです。二人はまた夜，出会うのです。火が足下で燃えています。一人は熱くて甘いお茶を差し出し，もう一人は物語をするのです。物語の言葉は効率よく巧みに最小限に縮められているのです。でもことばは価値を形成する無言のコンテキストの外には存在しないのです。美的，社会的，宇宙論的な価値が物語を意味あるものにするのです。そしてそういった意味がことばをコミュニケーション，即ち，繋がりをもたらす仕掛けにし，それと同時に様々な価値が社会的な意識を高めるのです。

お互いに知っている人々が直接会う時は，コミュニケーションを通して複雑さを獲得できるのです。距離が人々の間にある時や，メッセージが他の知らない人に伝えられる時，メッセージは小説と民話を分けるところの特徴を帯びつつ，詳しく述べなければならないのです。その一つの特徴が署名です。パーフォーマンス中の民話は語り手の個性で一杯になります。生気に満ちた光景や音，ジェスチャーやミュージカルな調べが奪われているので，小説は単なる言葉の中に，語り手のスタイルを持ち込まなければならないのです。二番目の特徴は記述する環境です。民話は歴史的な詳細が最小限になり，語られるべき環境は場所の経験を共有している参加者の想像力に委ねられるのです。ところが小説はその場面を明示するために時間がかかるのです。三番目の特徴は心理的動機付けです。民話は因果関係について聞き手に彼ら自身の憶測を展開させながら，話を行動に絞るのです。しかし小説は物語の登場人物の個性や動機を明らかにするために展開しなければならないのです。何故なら著者は読者が登場人物の行動を理解できるものと想定できないからなのです。動機が第四の特徴，つまり文化的価値へと導きます。民話は聞き手の心に文化的問題を引き起こす行動に対して暗黙の価値を委ねるのです。けれども小説は文化に関して異なる読者が物語のなかで哲学的に重要な何かを確実に把握するように価値を表面化しなければならないのです。

20世紀で最も重要な小説であるジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』について考えてみて下さい。ジョイスは芸術の総ての作品は署名であると言い，彼の小説を見事な表現から成る文体上の名人芸にしています。彼は物語の背景，時，場所の詳細について徹底的に取り組んだのです。そしてその当時のダブリンは彼の本から再構成できると言明したのです。『ユリシーズ』において，ジョイスは読者をジョイスの登場人物の心の中へ迎え入れ，登場人物の心理的動機付けを明かす内面的なモノローグ（独白）の考えを発展させたのです。ジョイスの登場人物は文化を明らかにするために話し捲るのです。経済的，社会的，政治的，宗教的，美的，知的な価値は言葉として結実されているのです。

メッセージが精巧になるにつれて，反応はほとんど排除はされないのですが，反応の選択の幅が狭まります。ジョイスは「私がまだ生まれていない教授たちに仕事を提供しているのだ。」といったのです。そしてそういわれた人々が山のような解釈の本を書いたのです。ジ

ョイスのような偉大な小説家という天才は暗示と結末のない複雑さを組み立てて読者を興奮させるようにしています。ある意味でジェームズ・ジョイスは民話の語り手に似ています。ジョイスの文化，20世紀初頭のダブリン，その通りで使われる言葉や皆の関心事である政治上の話題について知れば知るほど，ジョイスの小説は少しも曖昧ではないように思えてくるのです。彼の小説が狭まり，深まるのです。言い換えると，ジョイスの小説は枠組みを備えた民話や叙事詩とは異なるのです。そのわけはジョイスの小説は署名，背景，動機づけにおいて途方もなく，そうすることによって価値を明白に表現しているからです。

人々を隔てる距離を埋めるため，小説はコンテキストをテキストの中に集めるのです。聴衆の心に静かに共振する対話的，連想的，逆説的な民話の特徴が集められ，小説の言葉の中に明白にされているのです。メッセージの送り手と受け手はコミュニケーションを媒介にして繋がりますが，送り手の責任と力が増し，受け手の責任と力が減少して来ています。豊かな意味を安定した水準に保つには，メッセージの複雑さを増すことなのです。最も優れた小説は民話がたやすく行うこと——民話が人々の間で理解されている重要な事柄に人々を十分に近くまで導くこと——を苦労を重ねて達成するのです。

見知らぬ他者へ近づき，また個人的に著者を知らず，著者のものの見方を必ずしも共有しない人々の注意を捉えるように意図すると，物語は拡大し，精巧になるのです。そのメッセージは複雑になります。反応は枠にはめられ，ある方向へ導かれ，制限されるのです。距離を伴うと，メッセージは精巧になり，テクノロジーに依存するようになるのです。民話は直接会って話をする人々だけを必要とします。小説は生産と流通のテクノロジーを必要とします。つまり紙とペン，印刷機，輸送手段です。

小説はモダンの様式を持ち，産業テクノロジーに頼る，疎外に対するすばらしい反応のように思えます。もっとも，小説は古代ギリシャや中世の日本において書かれ，読まれてはいるのですが。精巧なテクノロジーが我々の時代を特徴づけています。その達成を誇りとするとき，我々は遠く離れているにもかかわらず，コミュニケーションにモダンなものや，ポストモダンのようなものさえ引き起こしているのは，テクノロジーであると考えたくなるのです。ところが長距離のコミュニケーションという考えに新しいものは何もないのです。

ディヤード・キップリングは書くことの発明の寓話を有史前のある部族社会のコンテキストの中に設定しました。ある少女と父親は書くことを発明したので，彼が川で釣りをして留守なのに彼の妻とコミュニケーションができたのです。キップリングの作品は子供たちだけのための話でしたが，書くことは商業や政治権力といったそれほど優しくないコンテキストにおいて発達したように思えるのです。古代では，我々自身と同じように，商業や政治権力は直接会えない人々を結びつけるため，空間という広大な広がりを横切って送れる明確なメッセージを必要としました。戦争中に政治指導者であったエイブラハム・リンカーンは最も

素晴らしい人間の発明は書くことであると宣言しました。書くことは明らかに長距離コミュニケーションの古代テクノロジーです。そして書くことは現代における発展の基礎として存続しています。しかしコミュニケーションのテクノロジーは実際よりも書くことの日付を何千年以上も早めているのです。

コミュニケーションのメッセージを生産する古代テクノロジーは，今日我々がアート（美術）と呼びがちなものです。洞窟の壁にある旧石器時代の絵は我々の住む世界と純粋な力の世界を分けるもの，あらゆる距離のなかで最大なもの，距離を超えてコミュニケーションをするという欲望を暗示しています。洞窟の壁に描かれたメッセージ——動物，動物の霊，自然を支配する神々——を誰が受け取ることになっているのか，我々にはわかりません。しかし，我々は宗教芸術の中に神とコミュニケーションを欲する人間の普遍的な願いを見ることができます。『バガバッド・ギータ』におけるクリシュナと『ロータス・スートラ』（妙法蓮華経）における仏陀は人間からコミュニケーションを招来するのです。カソリック教会の祭壇にある聖者の像は——おそらく洞窟に描かれたマンモスがそうだったように——二つの世界をコミュニケーションするために使われる道具なのです。

希望と大胆さにおいて，聖なるものの古代テクノロジーは我々の時代の如何なるテクノロジーをも凌駕しています。ヒンドゥー教の彫刻家は神を称えるマントラを繰り返しながら祈ります。そして神の直接の啓示を受けるのです。神のイメージは彼の心に正確に形づくられます。そしてそれから彼は目に見えるようにそのイメージの存在を現前化するために粘土で制作するのです。彫刻家が形成し，彩色を施した像は寺に安置されます。ちょうど，祈りが神を彫刻家の心に招来させるように，祈りが神を像に招き寄せるのです。熱心な帰依者は視線をその像の持つ眼と接触させ，花を捧げ，心の願いを神に知らせ，一方，神はこの世での祝福を持ってお答えになると期待されているのです。美しい土の像は宇宙を司る不可視の力でもって熱心な帰依者をコミュニケーションへ導く一つのテクノロジー的装置なのです。

祈り——イスラム教の言葉，ヒンドゥー教徒の像，アメリカ・インディアンの舞踏——は長距離コミュニケーションの最も勇気ある，過激な例です。祈りは束の間のものと時間を超越したもの，見えるものと見えないもの，人間と神，この世とあの世の間の繋がりをもたらします。人間の創造性のしるし，数学の公式，ロックンロール・ミュージックをのせて宇宙へ打ち上げられたロケットは我々の祖先が何千年もの間行って来たことを最新の試みとして行っているに過ぎません。

もし我々がその最も古代の大望からコミュニケーションの範囲を縮め，世俗的な領域に注意を向けると，我々は人間の物語において古くからあるグローバル化の傾向と異文化間の繋がりとを見いだすでしょう。我々が描く過去の光景は農業を営む共同体の中に定住し，土地に根付き，炉端で物語りする人々で埋まるのかもしれませんが，過去にさらに目を向けるな

ら，大規模な移動を眼にするでしょう。人類の夜明けは移住の時代でした。もし移住がなかったなら，日本にも北アメリカにも人は居なかったでしょう。そしてもしもっと時代を下って，人類が定住し，地方的な存在となったということだけを多くの人々が知っているとしても，遊牧民，商人，乞食のような托鉢の予言者といった他者は常に移動していたのです。その移動の一つの結果が静かな炉端で語られ，直接面と向かった場面で何度となく繰り返された物語が，無数の異文化環境で採用され，適応し，順応して，地球を横切ってもたらされ，同時に古代の繋がりの形態的な痕跡を保持しているのです。

共同体にとって新しい民話は娯楽と教えを求める昔からの欲求にかなったのです。流通に関する古代テクノロジーは徒歩か，馬か，帆船による旅に頼り緩慢でしたが，生産の古代テクノロジーは複雑でした。遠隔地の生産者は様々な創造の特質を組み込んでいったのですが，そうした創造性がその分散を促進し，かつそれの需要を鼓舞したのです。風変わりで新しいものは異質の伝統から生まれ，実用的で，美的で，霊的なメッセージ群を通してそれぞれの土地の必要性を満たしていったのです。

役に立つ考えは広大な空間を統一するために最も古い昔に広まったと考古学者は我々に語っています。我々の旧石器時代の祖先は大地を放浪したのです。彼らは改良された武器で狩猟し，狩りの神々と天空の神々とコミュニケーションしたのです。我々の新石器時代の祖先は定住し，史上最大のテクノロジー革命を成し遂げたのです。新石器時代の革新——町と農業，織物と陶磁器——が地球の大部分を横切ってもたらされ，我々の文明の基礎を形成し続けているのです。

美しいものは実用的（便利な）ものが調度，空間を越えて移動するように動いたのです。そのことは美的な必要は実用的な必要と同様に人間の存在にとって基本的なものであることを示しています。ヨーロッパを横断する有史前の貿易は美しい琥珀の断片によって追跡できるのです。そして最近の例がニューギニアからもたらされています。20世紀に，ヨーロッパ人がニューギニア高地の人々と初めて接触したとき，その長い旅は失敗に終わりました。何故ならヨーロッパ人の指導者たちは交易するために有用な斧を運んで来たのですが，現地の人々は装飾用の羽を望んだのでした。重要な地球規模の例は磁器に例示されています。陶器を磁器に改良した中国人の陶工はテクノロジー的奇跡を創造したのです。生産の複雑な手続きを通して，有用な品物がつくられ，それが本質的に優れているので，一般に求められるようになったのです。磁器はグローバルな人間社会の一つの目印となり，陸路やまたそれ以上にしばしば海路で，東と西へもたらされたのです。

何千年もの間，遠隔地へのコミュニケーションは複雑な生産テクノロジーと単純な流通テクノロジーによって特徴づけられていました。メッセージはとても豊かに精密な形をとって表現されているので，我々は今日，その当時のメッセージを調和させるのに苦労しなければならないのですが，当時は現代の我々が耐えられないとわかるほどゆっくりとした速度で動

いたのです。そのメッセージの本質的な卓越性がその新しさを取り入れることを鼓舞したのですが，その一方で，流通の緩慢さが適応を促したのです。丁度，国際的な民話が文化から文化へと受け入れられ，かつその文化に合うように再構成されたように，ゆっくりと到着するので，メッセージは同化され，地方特有のものになることができたのです。

磁器は美しかったのです。文化の違いや，中国からの距離にもかかわらず，人々は磁器を手に入れたがったのです。しかし隊商とか帆船で幾日もかけ，ゆっくりと移動するので，磁器は希少だったのです。値段は高く，供給は不安定であったので，磁器は模造品を活気づけ，さらに模造品をその土地特有のものにさせ，その土地の好みにあったものへと順応していったのです。15世紀，トルコの腕のいい職人は磁器と巡り会い，外見上良く似た陶器を発展させようと試みたのです。二世代の間に，彼らが中国磁器で気に入っているところはそのままにしながらも，自分たちの美的好みと宗教的な嗜好に合わせて，新しいトルコ独特な陶器を創造したのです。それから一世紀後，日本で有田の陶工は同様のことをしたのです。中国磁器を鍋島とか柿右衛門といった潤沢で独特な日本の美へと変容させたのです。次の世紀には，中国，トルコ，日本からの美しい作品が西欧で陶器革命を鼓舞するのです。そしてその革命が18世紀，英国で起こった産業革命にとって欠くことのできないものであると判明するのですが，中世の中国にその原型を成していたのです。

製品の優秀さが採用を促したのです。流通の緩慢さがその土地の創造性を刺激しながら，適応を引き起こしたのです。再創造することによって，異質なものはより親しい物になったのです。つまりその様にしてその土地特有のコミュニケーションの様式に適応するようになったのです。

宗教はこのグローバル化とローカル化という同時性の力学の一番良い例です。霊的メッセージはちょうど実用的で，美的なメッセージが幾日もかかってゆっくりと移動していったように，動いたのです。霊的なものは実用的なものや美しいものと同様に人間にとって欠くことのできないものなのです。仏教はヒンドゥー教から起こり，異なる環境を越えて，北と東へ移動しながら，中国と日本の霊的な要求に合うように適合し，再調整したのです。キリスト教はユダヤ教から起こり，ローマ帝国の基盤を通じて広がり，その伝播の過程で古くからの信仰に溶け込みながらヨーロッパに合った宗教になったのです。イスラム教はユダヤ教，キリスト教に続く，最後の黙示であり，西はスペイン，南はアフリカ，東はインドネシアまで広がりました。仏教，キリスト教，イスラム教の三大宗教は，我々が今日，特に新しいと考えている商業や政治権力に劣らず全体主義化してきており，同時にグローバル化して来ているのです。これらの宗教はその霊的メッセージを伝播させるため，書くこと・建築・美術という生産の複雑なテクノロジーを用いたのですが，流通のテクノロジーは緩慢だったので

す。どの宗教も完全な独占へ登り詰めることはなかったのです。そして，総ての宗教はその土地の文化に合うように巧みに調整したのです。ゆっくりとした伝播は霊的な差異の発展を許すこととなり，教義上の方針を横断して総合的な活動を可能にしたのです。例えばアジアにおける神秘主義者たちはキリスト教，仏教，イスラム教の諸思想を愛の宗教へと総合させながら霊的調和を探求したのです。

そういうわけで，昔からの交わりにおいて，実用的で，美しい，霊的な，本質的に優れているものが異文化を横切って，伝わって来たのです。そして一方，流通の緩慢さが内なる発展を刺激したのです。それが人間の営為にとって一番良い状況なのだと私は確信しています。真の孤立は民族誌の記録上は稀です。孤立の良いところは彼ら自身の装置に委ねた人々が完全にその環境を利用することを学ぶことでしょう。ただ他の場所で発展した一般的な問題を解決する知識を拒むと，彼らは自らの不完全なところをただ改善することができるだけなのです。新しい考えは自由でなければならないのですが，もしそのような考えが突然夥しくなると，その土地の文化を圧倒し，創造性やコミュニケーションを破壊するのです。新しい考えが入手可能なら，人が必要なものが一番良い状態で供給されるのですが，人はそういった考えを自分たちの伝統や環境へ合うように調整する為の時間を必要とするのです。そして，彼らの受け取ったメッセージを，送り出すことのできるメッセージに転換しながら，同時に人々の生活の質が依存するいろいろな繋がりをもたらすコミュニケーションを創造するのです。

我々の時代に起こっている変化はコミュニケーションの質を高める問題ではないのです。人々が何千年もの間ずっとしてきたように，直接会って話す時にコミュニケーションが一番豊かになり，かつ完璧なのです。そしてそれは生産の質の向上でもないのです。ひとたび，書くことが話すことから発展し，磁器が陶器から発展し，宗教が世界で最も素晴らしい建物——聖ソフィア寺院，シャルトル大聖堂，（トルコの）エディルネのセリミエ寺院，タージ・マハール寺院，奈良の東大寺——に具体化されたとき，我々は創造の頂点に辿り着いてしまったのです。新しいものは流通のテクノロジーにおけるスピードなのです。こういったテクノロジーはメッセージをより多く，より速くもたらします。そういったテクノロジーは明らかにコミュニケーションを促進させますが，想像する以上に破壊するのです。

ある比較が適切でしょう。軍事歴史学者ジョン・キーガンは医学の発展は負傷した兵隊の生命を救う我々の能力を増加したが，医学の発展は武器の発展と歩調を揃えなかったと議論しています。医学の発展にもかかわらず，兵士はもっとたくさん死ぬようなのです。戦争を止めなければいけないのだと彼は当を得た主張をしています。コミュニケーションの領域では流通のテクノロジーが進歩するにつれて，国際的な繋がりが強化されました。しかしそれはローカルな繋がりほど迅速ではなく，逆に，直接の繋がりに基づいた結合と深い文化的な

組み合わせ――ローカルな繋がり――は弱くなっているのです。総てを考慮すると，コミュニケーションは下り坂にあるです。

そうした例として小説について，遠隔地コミュニケーションはメッセージの複雑さを必要とし，その為に送り手の役割が高まる一方，受け手の役割を制限すると議論したのです。同じ例として磁器については複雑なメッセージがゆっくりと不安定にもたらされると，受け手は新しい物の創造者になると議論したのです。しかし，複雑なメッセージがすごい速さで，有り余るほどたくさんもたらされると，受け手はただの消費者に過ぎなくなるのです。創造とコミュニケーションのための選択は衰退しています。受け手の創造的行為は選択をすることに制限されているのです。コミュニケーションと呼ばれる過程は支配の過程へと変容しているのです。もしコミュニケーションが繋がりをもたらすやりとりとするなら，これはコミュニケーションではありません。複雑なメッセージ――例えばハリウッド映画――は送られてきますが，受け手は逆のメッセージを返すことができません。そして創造者自身の持つ価値を具体化するため，新しい創造へとその受け取ったメッセージを再構成することが不可能ではないにしても，益々困難になっているのです。その様な再構成をしながら，受け手は創造者となり同じ心を持つ他者とコミュニケーションできるのです。

アメリカのポピュラー音楽の展開を追跡してみましょう。かつてはどの共同体にも独自の音楽家がいたのです。彼らは共同体の年長者たちから学びました。そして巡回してくる行列聖歌集や安価に印刷された歌本から新しい考えを入手したのです。彼らの音楽伝統は安定した変化の状態にあったのです。テクノロジーが発展してくるとエージェントが田舎に入り込んできて，特別に才能のある音楽家たちから録音したのです。彼らの演奏は機械の限界に合わせて長さを著しく切り詰められ，その後に，舗装された道路をトラックで配送され，放送電波に乗り，ラジオで送られたのです。他の土地出身の一番いい音楽家の演奏を聴きながら，地方の音楽家はこれまでにない極致に達した技巧的名人芸に鼓舞されたのです。その上，商業的可能性が認識され，蓄音機とラジオが行き渡るにつれて，いろいろな地方の伝統はわずかな数の一般的な民族様式の中へ覆い隠され，統合されていったのです。自家製の音楽は存続してはいますが，レコードからの模倣のために益々均質になっていき，アメリカ合衆国の伝統音楽はポピュラー音楽の二つの主要な様式――カントリー・アンド・ウェスタンとリズム・アンド・ブルース――へと統合されていったのです。生産と流通の複雑なテクノロジーのおかげで，労働者階級の白人と黒人は彼ら自身で交流しあい，その一方で彼らの録音されたものは市場で一般に入手でき，ロックンロールという統合を可能にしたのです。ポピュラー音楽はエルビス・プレスリー，ボブ・ディラン，ビートルズたちが創造的に活躍していた時期に統一され，そしてその後，商業的な成功は単一化をもたらしたのです。伝統的な音楽が小さい共同体に属していた時は様式とメッセージが変化に富んでいたのです。古い歌は心を

悩ませ，感動させ，魂に触れる最も奥深い結果をもたらしたのです。ポピュラー音楽が大量流通のためにスタジオで規定の方式に従って再編成されると，最も広範囲に渡って受け入れられたのです。そして単一の主題――常軌を逸し，エロティックな男女の関係――を扱った単一のスタイルを持つ短い大衆受けを狙った演奏によって優位を占めるようになったのです。

ジェイムズ・アンジーが言ったように，アメリカは売れる物は何でも売るので，ポピュラー音楽，つまりアシッド・ロックや今日のラップ音楽は危険なメッセージに包まれています。ただいくつかの労働階級の人々のために創られた音楽には様式的な多様性がいくつか点滅してはいますが，テクノロジーが精巧になるに伴い，単一なスタイルと単一で簡単なメッセージが主流になって来たのは否定しようがありません。それと共に何千という地方の伝統がその過程で抹消されて来たのも確かなのです。国家的，国際的な繋がりは増えています。アメリカのポピュラー音楽はどこに行っても耳にすることができます。それと同時に，地方の伝統は潰されたのですが，ただ完全に絶たれたのではなく，僅かの隙間とか周辺に追いやられたのです。結局のところ，アメリカ合衆国では，音楽のコミュニケーションが流通のテクノロジーの進歩に伴って多様性と質の面で衰えてしまったのです。

生産のテクノロジーにおける複雑性は実用的，美的，霊的な必要に仕えます。流通のテクノロジーにおける複雑性は商業と権力の必要に仕えます。過去の植民地の時代には強大な国家は攻撃に対して手も足も出ない国の富を直接取り上げました。スペイン人はラテンアメリカの銀を持ち去りました。英国人はアフリカの人々を連れ去り奴隷にしたのです。新しい植民地主義の時代では強力な国家は無防備の人々を消費者にしようと励むのです。それ故，無防備な人々の持つ富は間接的に合法的に搾り取られるのです。船と火器が昔の植民地主義の手段でした。映画とテレビとコンピューターが新しい植民地主義の手段なのです。そういったことが極端のように思えるとしても，貧しい国家であるバングラデッシュの一市民であり一知識人でもある人物がまさに私に語ったことなのです。即ち新しいテクノロジーは新しい植民地主義であると。貧しい国は追いつくために，遅れないために，もがきながら極めて高価な機械を購入しなければならないのです。その一方でその装置を製造する豊かな国へ僅かしかない大切なお金を支払わなければいけないのです。貧乏な国は貧乏なまま取り残され，力を凋落させながら依存状態を強めるのです。

生産のテクノロジーはとても複雑で，流通のテクノロジーはあまりに速いので，労働階級の人々にとっての映画，中流階級の人々にとってのテレビ，エリートのためのコンピューターはコミュニケーションの装置であるように見えながら，強化・合併中の新植民地主義権力の装置であるようになおのこと思えるのです。

さて私が果たすことになっている，未来へ転じることにしましょう。気味の悪い光景がた

やすくイメージに浮かび上がります。我々は人々が独りで座り，機械を見ながら，伝達されては繰り返されるメッセージの弾幕の中から世界のある見方を組み立てている様子を未来に描いているのかも知れません。最も広範囲の聴衆に届くように容赦なく簡略化されると，そういったメッセージは暴力やセックスの閃光が割り込む宣伝となるのです。大型の技術的に進歩したテレビを見ている人々は，お金が十分でないこと，つまり手持ちのお金が必要でもない商品を買うために，その必要とする額に満たないということを悟るのです。テレビを見ながら，暴力に興をそそられ，子供たちは級友を殺害するために技術的に進んだ火器を盗むのです。その子供たちの両親は拮抗するイデオロギーではなく，セックス・スキャンダルとしての政治について思いを馳せるのです。人々がいつものように話をし始めると，昔は最高のあらゆる哲学的な問題を提起する聖書の引用でいっぱいであった人々の会話が，有名人やテレビの喜劇や昼メロなどのいかがわしい人々についてのゴシップに限られてくるのです。

もちろん，物事はそれほど悪くはならないでしょう。しかし未来の一つの選択はマスメディアの支配に対する盲従か，黙従です。二つめが抵抗でしょう。機械を通してやってくる夥しく冗長な情報は，創造的な統合へと導く漸次的，批判的な反応を許す余地がないので，人々は消費者の役を受け入れるか，その機械を止めて，活性化の精神を持って進歩に背を向け，拒絶することになるでしょう。

私は電気がそしてそれからテレビがいろいろな田舎の共同体へやって来たのを目撃しました。それ故，私はテレビがいろいろな反応を引き起こすことを知っています。ある共同体の人々は彼ら自身の文化の遅れに当惑し，彼らの持っているお金を手に入れようとした連中が送ってきた幻想を受け入れることを拒むのです。また別の共同体の人々は自分たちの知っていることと，テレビで見ることとを比べながら，彼ら自身の文化について建設的な評価を引き出すのです。テレビで恐ろしい選択肢——欲に溺れた神を認めない人々とか，バラバラに引き裂かれた家族——を見た人々は彼ら自身の生活の仕方をしっかりと維持することを決めるのです。過去の単純な見方は我々に未来の単純な見方を提供します。もし我々が歴史を進歩という狭い物語に限定すれば，我々は変化のしるしを我々の周りに見て，新しいテクノロジーの勝利と，近代化の勝利を未来に見るのです。我々は個人主義的な態度，この世の世俗的秩序，国際的な繋がりといった事例を集め，それらを近代化の名の下に統一し，一つの未来の見方を持つ歴史を構成するのです。しかし，歴史に対するもっと繊細な理解と現代生活のもっと厳密な描写は活性化という素晴らしいグローバルな対抗勢力に対し，我々の覚醒を促すことと思います。活性化に向けて，人々は未来を見るために過去を見るのです。人々は共同体や，聖なるものや，ローカルなものを肯定することによって近代化に反対するのです。

英国は最初に近代化し，英国人は最初に近代化の限界を見たのです。英国の資本家は工場を建て，英国人労働者はその工場を全焼させ，英国人の理論家は産業の暴虐から自由な未来を夢見たのです。

日本は活性化の世界的リーダーです。流通が意図的に妨げられ，各地に創造性が素晴らしく花開いていた徳川時代の後に黒船がやってきたのです。一世代経たないうちに，知識人たちは西欧化に対抗し始めたのです。新しい接触によって進歩し，活性化の反勢力によって和らげられた日本文化は世界のために新しいパターンを発展させたのです。日本人は国際的な進歩と暴力に加わりました。しかし，日本人は彼ら自身の美術と文化に対し，認識を新たにし，日本人として留まったのです。他の近代国家——例えばスウェーデンとかトルコ——は比較することのできるダイナミックな均衡に達したように思われます。貧しい国にはほんの僅かな選択しかありません。新植民地主義の文化の消費者となって従うか，自分たちに合う未来を創造するための道を自分たち自身の過去に見出しながら抵抗するかなのです。そういった絶望的な努力は現代のアフガニスタンに痛々しく示されています。

未来への一つの選択肢は追従です。我々は流通の迅速なテクノロジーによって中継されるメッセージを消費する個人になることができます。もう一つの選択肢が拒絶です。我々は過去の夢から文化を構築できるのです。健全な状態とは近代化を進めるマスメディアに対して多くの議論があり，その土地の伝統を認め，維持することによって迅速な流通を押し止めることのできる状態を指します。地方の再活性化を促し，人々が自分たちのために人並みで満足できる生活を営むことができる機会の弁証法を引き起こしながら，議論を通じて我々はゆっくりした流通の時代を人工的に復興するかもしれません。

望みは新しいテクノロジーと一緒に育った若い人々が彼らの年輩の人々がそうであったほど新しいテクノロジーに魅せられていないことです。彼らは資本の所有者が自然に儲けが多くなるといった狭い幅の解釈に限定されていません。機械は彼らの命令に従い，そしておそらく，若い人々はゆっくりとした流通が存在した時代にいるのと同じような豊かで且つ響き渡るメッセージを受け入れ，且つ送ることができるのです。彼らはすでにインターネットでお喋りしながら機械を彼ら自身の個人的な興味に役立てることを知っています。彼らのやっていることは，繋がりが瞬間的なので，新しく思えますが，実は電話が現れて以来繋がりはあっという間のことだったのです。私の子供は電話は高くつくけれど，電子メールはそうではないと議論します。彼らの議論は自分たちの特権を忘れていることを示しています。何故なら彼らの使うコンピューターとそのコンピューターが必要とする基礎構造はあまりに高価なので，世界でほんの僅かな人々がグローバル化の，広大とはいえ，奥行きはない，その過程に参加することができるからなのです。グローバル化の最大の受益者は機械の製造業者であり，技術の所有者であり，世界で一番裕福な人々なのです。銀行や大企業が新植民地の領域を広げるにつれて，同様に利益を得るのです。とはいえ，利益は遠くにいる人々と繋がりを保持したいと思う個人にもやって来ます。そういった人々が旧石器時代の祖先が洞窟の中で火を囲んで座り，ジョークやゴシップを言う時にずっと上手くやっていた事をするために，

非常に高価な装置を使いながら，現在，雑談しているのです。人々は機械を通してコミュニケーションしながら繋がりをもたらすやりとりをするのですが，“虚”の共同体（ヴァーチュアルな共同体）として束の間のネットワークについて語る時，新しいテクノロジーの違いを曖昧にしながら，一方では新しいテクノロジーを親しみのあるように思わせるメタファーの一つ（ヴァーチュアルな共同体）によって人々は困惑するのです。コミュニケーションはその目的を共同体の創造において達成するのです。共同体は儚い利益集団ではありません。共同体とは特定の目的を持った人々の集まりであり，彼らは彼らの運命が互いに繋がっているように考え，興味や意見や気質の違いにもかかわらず，必要な時に相互に助けを頼むことができるのです。共同体が実体ではなくヴァーチュアル（虚）であるような人は，本当に繋がっているのではなく，孤独で，最後には傷つきやすい人なのです。得られるものといえば，見知らぬ人々と電子的に繋がりを持つことなのです。失うものは，偉大さにとって必要な自信や，安全の感覚を生む土地との繋がりなのです。

我々が新しいテクノロジーの膨大な可能性について限りない熱意を持って語るとき，私はなぜ我々が実際に成し遂げたことをじっくり考えようと立ち止まらないのかと思うのです。よりたくさんの情報，より多くの繋がり――それらはいったい何のためのものなのでしょうか。電話が新しかった頃，グレゴリー夫人は電話が創造性に必要な思考のゆっくりした流れを妨げることについて特に言及しました。我々が電話の主人となるのか，それとも優れたものを創造する能力を破壊しながら，電話が我々の主人となるのかと言ったのです。もし我々が機械を支配しないと，ジョージ・バーナード・ショーのような優れた作品を創れる人は将来居なくなるでしょうとも彼女は言ったのです。ショーはシェイクスピアどころではありませんでした。最も偉大な英国の詩人はゆっくりした流通の時代に生活しました。シェイクスピアと同じくらい才能のある人々は現代でも生活しています。彼らはテクノロジーの恩恵を受けているように思えますが，古い物語に基づいた昔の演劇である『ハムレット』とか『リア王』に匹敵するものは何も創っていないのです。

我々がテクノロジーに感激して馳せ参じるとき，世界で最も素晴らしい言葉のコミュニケーションはコンピューターの時代ではなく，いわんや，印刷機の時代でもなく，技巧的な演説や単調で退屈な写本，叙事詩や教典の時代に創作されたということをしっかりと思い起こさなければいけません。つまり『マハーバーラタ』，『イリアッド』，やダンテの『神曲』のことですし，『聖書』，『コラーン』，『ダンマパダ』（法句経）のことなのです。

問題は今日若い人々が機械をマスターできるかどうかということなのです。広告を送ったりお喋りしたりする以上のことができるのでしょうか。農業と同様に実用的で，磁器と同じぐらい美しく，ルーミーの『マスナヴィ』ほどに深遠に，メッセージを適応させることができるのでしょうか。もしできるなら，新しいグローバルな秩序は過去に創られたグローバル

化の秩序と同様に人間精神にとって歓迎すべきものとなるでしょう。

知ることのできない未来という夢の世界に住む楽観主義者は新しいテクノロジーを人間の可能性を実現する手段と見なします。消え去った過去という夢の世界に住む悲観論者は新しいテクノロジーを新植民地的な抑圧の装置に過ぎないと見るのです。直観の世界に住む人はあまりに多くの情報は創造的な想像力の代わりではなく，伝達の速さは意味の豊かさの代わりではなく，繋がりの多様性は繋がりの深さの代わりではないことを知っているのです。

未来において，ある人は追従し，そして挫けてしまうでしょう。ある人は抵抗するでしょう。そしてある人々は――望ましいことなのですが――機械がやれることは何なのか，また，できないことは何なのかを学び，新しいテクノロジーを使って重要なメッセージを手際良く創り，人々が利用できる実用的で，美しく，霊的な考えを供給し，同時に彼らは自らの思想とモラルに則った組織を形成するでしょう。そして他の人々，即ち他の大多数の人々は今日のまま残るでしょう。つまり，グローバル化の力の及ばない彼らの仕事と，道端で旧友が会ったときに起こる会話に夢中になるのです。

誰かが言わなければならなかった事ですから，私が言ったまでです。次の世紀でも，ほとんどのコミュニケーションはこれまでと少しも変わらないでしょう。直接面と向かい合った会話のことです。情報は同化できないほどの量に増え，繋がりは分岐するでしょう。コミュニケーションは下り坂になります。しかし，ゆっくりとです。何故なら人は人なのですから。

Communication in the Twenty-first Century

Henry Glassie

The year two thousand: the new millennium is causing us to stop for a thought. We might have been prompted to look backward in evaluation, for we can know something about the past. Instead, devotees of progress, we choose to look forward, to speak about the future. About the future, we can say much but know nothing.

I am asked to speak of communication in the twenty-first century. Accepting my task, I find myself acting in a particular western tradition that began, so the story goes, with Jean-Jacques Rousseau on a road in France. Formulating an answer to the question of progress, Rousseau was struck violently by the unlikely thought that progress had brought more harm than benefit to humankind. I expect that what I am supposed to do is to think of communication in terms of technological progress and then to imagine a future in which everyone will be wired into oneness and amazing new machines will advance communication. Instead, I believe that communication is now in decline and that communication in the new age will be worse, not better. That is, at least, an interesting critical position, and knowing no way to envision the future, except by searching history for pattern, I will begin by defining and describing communication.

Communication is an exchange that brings connection. It is exemplified most perfectly in the intimate encounter of conversation. People meet and they talk.

The scene is rural. A country lane runs beneath a pale green hill. Low gray clouds sweep across the sky. The air is cold and wet. Paddy is hacking the hedge along the lane with a billhook. Tommy enters from the left, wheeling his black bicycle. "That's a bad day," says Tommy in greeting.

"Aye. The worst," replies Paddy.

They are farmers. Their evaluation of the climate is crucial to their lives. Agreeing on the weather, they agree on what work should be done in this season. Tommy stops. They turn

their backs to the wind from the west, and Tommy gives Paddy a cigarette. In the shelter of Tommy's coat, Paddy cracks a match and lights them both. "Any news in the town the day?" asks Paddy.

"Not a haet," says Tommy.

It is the day of the cattle mart, and Tommy has ridden his bicycle to town to watch. His answer tells Paddy that there is no change in the price of cattle, the sale of cattle providing both men the little cash they have.

"Is James in the house?" asks Tommy.

"Aye. He is," Paddy replies. They stand side by side, looking at a wet hedge. The wind whips the smoke east. "Your man's cows are bad," says Paddy.

"Aye," says Tommy. "That's the way now." Their cigarettes are finished. Tommy grips the handlebars and begins to move. "All the best," he says.

"All the best," answers Paddy, turning back to the hedge, the billhook in his hard hands.

Little was said, but much happened. Together they gauged the health of the community. James is in the house, meaning he is still ill, and his neighbors will have to gather soon to dig his garden so that he will have food in the coming year. James is a good neighbor who will get help in his time of need. The man left unnamed has refused to help his neighbors in the past. His cows are failing for want of food. His case was raised, and the men agreed to offer him no aid, to let the cows, the source of his income, die one by one.

In exchanging news, in trading a cigarette for a match, and pausing from work to smoke together, they affirmed their connection. Their words consolidated their community, defining who belonged and who did not. In word and act, they agreed that they were part of a larger corporate entity. Each is prepared to help the other. Their sparse words ride upon a shared understanding of a reciprocal ethic.

When old friends meet, little needs to be said for much to transpire. Sharing the experience out of which culture is built, sharing the culture out of which social relations are shaped, old friends can count upon a density of independent, inner response to turn a few words into a communication, an exchange that brings connection. With connection, matters of importance can be raised for serious consideration.

The nature of common communication has been captured best by Samuel Beckett. As I read *Waiting for Godot*, the greatest play of the twentieth century, two old friends meet on the road. Vladimir and Estragon are like Paddy and Tommy. But the few words they say are left unspoken. Instead, Beckett has them speak aloud the complexity of their anguished, inward, silent responses—the passionate harmony that accompanies the simple melody of the verbal surface.

The witty comment that *Godot* is a play in which nothing happens twice obscures all that does happen. During two visits from outsiders, the old friends see the rapid decay of hierarchical social relations founded on dominance and deference. An angelic boy witnesses to them of the existence of Godot, for whom they continue to wait. And while they wait, the old friends determine to stay together, to preserve the connection that their stumbling, halting communication has created.

In the common conversation of old friends, spare texts and rich reactions lead to social commitment. When old friends elevate the dynamic of conversation toward excellence, their creations retain an abstract formation that shapes a generous, but not limitless, realm for response. They produce the works of art we call folklore. In the folktale, there is no psychological elaboration, no descriptive digression, no ideological coercion. The narrative unfolds geometrically. Minimally characterized personages move across undescribed landscapes, while the listeners come to their own conclusions. The listeners know the narrator. He has no need for exhibitionistic display; his performance is full of personality. The narrator knows the audience. He shares their experience. He need not tell them what a hill looks like, or a house. He shares their values, and he can count on them to derive the proper judgment from an austere presentation of the facts of the case.

Old friends meet on the road, share a smoke, and their unity is affirmed. They meet again at night. The fire glows at their feet. One gives a mug of hot, sweet tea. The other gives a story. The story's words are efficiently, artfully pared to the minimum, but the words do not exist outside the unspoken context of values. Aesthetic, social, and cosmological values make the story meaningful. And meanings make words into communications, devices to effect connection, while values are raised to consciousness.

When people who know each other meet face to face, the message that makes their communication can attain complexity through simplicity. When distance opens between people, when the message is transmitted to an unknown other, it must elaborate, taking on the traits that separate the novel from the folktale. One trait is signature. The folktale in performance is suffused with the personality of the teller. Stripped of animating sight and sound, of gestures and musical tones, the novel must carry the narrator's style in mere words. A second trait is descriptive setting. The folktale minimizes historical detail and trusts its setting to the imagination of the participants who share an experience of place. But the novel must delay to make the scene explicit. A third trait is psychological motivation. The folktale narrows to action, leaving its listeners to develop their own theories of causation. But the novel must expand to clarify the personalities and motives of the story's characters, for the author cannot assume the reader will understand their actions. Motivations lead to the fourth trait: cultural value. The folktale leaves values inchoate in actions that raise cultural issues in the minds of the listeners. But the novel must bring values to the surface to be sure that readers different in culture will grasp something of the tale's philosophical import.

Consider *Ulysses* by James Joyce, the prime novel of the twentieth century. Joyce said that every work of art is a signature, and he makes his novel into a dazzling display of stylistic virtuosity. He worked scrupulously on the details of the setting, the time and place of his story, and declared that the Dublin of the period could be reconstructed from his book. In *Ulysses*, Joyce developed the idea of the interior monologue, welcoming the reader into the minds of his characters, revealing their psychological motivations. His characters talk and talk to make culture explicit. Economic, social, political, religious, aesthetic, and intellectual values are brought forth in words.

As the message elaborates, options for response are narrowed, though response is hardly eliminated. Joyce said that he was providing jobs to professors yet unborn, and they have written piles of books in interpretation. The genius of a great novelist like Joyce is to excite the reader by suggestion, by framing complexity in unresolution. In a way, James Joyce is like the teller of a folktale. The more one knows about his culture, about Dublin in the early twentieth century, about the dialect of the streets and the political topics in the air, the less his novel seems ambiguous. It narrows and deepens. In another way, Joyce's novel is unlike a folktale or the epic that provided its frame, for it is extravagant in signature, setting, motivation, and articulated value.

To compensate for the distance that divides people, the novel gathers the context into the text. The dialogical, associational, and paradoxical qualities that vibrate silently in the minds of the folktale's audience are appropriated and made explicit in the words of the novel. The sender of the message and its receiver will connect in communication, but the responsibilities and powers of the sender grow, the responsibilities and powers of the receiver diminish, and a steady level of rich meaning is maintained by the increasing complexity of the message. With much effort, the best novel does what the folktale does easily: it brings people close enough for a matter of importance to be understood between them.

Designed to approach unknown others, to seize the attention of people who do not know the author personally, who do not necessarily share the author's point of view, the story expands and elaborates. The message becomes complex. Response is framed, channeled, restricted. With distance, the message elaborates, and it becomes dependent on technology. The folktale requires no more than human beings who meet and talk. The novel requires technologies of production and distribution: paper and pens, printing presses, vehicles of transport.

The novel could seem like a modern form, a brave response to alienation that is reliant on industrial technology. But novels were written and read in ancient Greece and medieval Japan. Elaborated technologies characterize our age. Proud of our achievement, we are tempted to think of technologies that allow communication to occur despite distance to be something modern, or even postmodern, and yet there is nothing new in the idea of long distance communication.

Rudyard Kipling set his fable of the invention of writing in a prehistoric, tribal context. A little girl and her father invented writing so that he could communicate with his wife while he was off fishing at the river. Kipling's was only a story for children, and writing seems to have developed in the less benign contexts of commerce and political power. In ancient days, like our own, commerce and political power required clear messages to be sent across wide stretches of space to connect people who did not meet directly. A political leader in the midst of a war, Abraham Lincoln declared writing to be the greatest human invention. Writing is certainly an ancient technology of long distance communication, and it remains foundational to contemporary developments. But technologies of communication predate writing by many millennia.

The ancient technology for the production of communicative messages is what we are apt

to call art today. Paleolithic paintings on the walls of caves imply a desire to communicate over distance—the greatest of all distances, the one that divides the world we inhabit from the world of pure power. We cannot know who was supposed to receive the messages painted on the cave walls—animals, the spirits of animals, the gods who ruled nature—but we can see in religious art a universal wish by human beings to communicate with the divine. Krishna in the *Bhagavad Gita*, and the Buddha in the *Lotus Sutra* invite communication from humankind. The statue of the saint on the Catholic altar is—as perhaps the mammoth on the cave wall was—a tool used to communicate between the worlds.

In hope and daring, the ancient technology of the sacred outstrips any technology of our time. The Hindu sculptor prays, repeating a mantra of praise, and receives a direct revelation of the divine. An image of a god forms precisely in his mind, and then he works with clay to give the image presence to the eye. His shaped and painted statue is installed in a temple. Prayer brings the god into the statue, as prayer brought the god into the sculptor's mind. The devotee connects eye to eye with the image, gives flowers, and makes the heart's wishes known to the god, who will respond, it is to be hoped, with worldly blessings. The beautiful clay statue is a piece of technological apparatus that brings the devotee into communication with the unseen forces that rule the universe.

Prayer—the words of the Muslim, the statue of the Hindu, the dance of the American Indian—is the most courageous and extreme instance of long distance communication. It effects connections between the temporal and timeless, the seen and the unseen, the human and divine, this world and the other. Shots into space bearing signs of human creativity, mathematical formulas and rock and roll music, are but the latest attempt to do what our ancestors have done for thousands and thousands of years.

If we reduce the scope of communication from its most ancient ambition and concentrate upon the worldly sphere, we will find cross-cultural connections and globalizing tendencies to be old in the human story. Our vision of the past might fill with people settled into agricultural communities, rooted in place and telling stories at the hearth, but if we look farther into the past, we will see massive motion. The human dawn was a time of migration. Were it not, there would be no people in Japan or North America. And if many in later days knew only a settled, parochial existence, others—nomads and merchants and mendicant seers—were constantly moving. One result of that motion is that the stories told at the quiet hearth, repeated in face-to-face scenes, were borne across the globe to be adopted and adapted, adjusted to innumerable different cultural settings, while retaining morphological signs of ancient connectivity.

The folktale new to the community answered old desires for entertainment and instruction. Ancient technologies of distribution were slow, dependent on travel by foot or horse or wind-driven ship, but ancient technologies of production were complex. Distant producers built into their creations qualities that sped their dispersal and inspired their acceptance. Strange new things, built out of foreign traditions, met local needs through their utilitarian, aesthetic, and spiritual messages.

Archaeologists tell us that useful ideas diffused in the most ancient days to unify wide

expanses of space. Our paleolithic ancestors roamed over the land. They hunted with improved weaponry and communicated with the gods of the hunt and the gods of the sky. Our neolithic ancestors settled and created the greatest technological revolution in history. Neolithic innovations—towns and agriculture, textiles and ceramics—were carried across most of the globe, and they continue to form the basis of our civilization.

Beautiful things moved over space just as useful things did, suggesting that aesthetic needs are as basic to human existence as practical needs. Prehistoric trade across Europe is traced by pieces of beautiful amber, and a late instance is provided by New Guinea. When, in the twentieth century, Europeans made their first contact with the people of the highlands, the expedition failed because its leaders brought useful axes to trade, but the people wanted decorative feathers. A great global example is provided by porcelain. The Chinese potters who refined pottery into porcelain created a technological wonder. Complex procedures of production yielded a commodity that, by its inherent excellence, became generally desired. By land, and more often by sea, porcelain was carried east and west to become one marker of the global human order.

For thousands of years, communication over distance was characterized by complex technologies of production and simple technologies of distribution. Messages formulated so richly that we must struggle to match them today, moved at a rate that we would find intolerably slow. The inherent excellence of the message inspired adoption of the new, while the slowness of distribution fostered adaptation. Arriving slowly, the message could be assimilated and localized, just as the international folktale was accepted and rebuilt to suit culture after culture.

Porcelain was beautiful. Despite differences in culture and distance from China, people wanted it. But moving slowly in the days of caravans and sailing ships, porcelain was rare. The cost was high, the supply was uncertain, and so porcelain inspired imitations that naturalized the idea, adjusting it to the local taste. In the fifteenth century, Turkish artisans encountered porcelain and experimented to develop a ceramic ware that was similar in look. Within two generations, preserving what they liked in Chinese porcelain, but changing it to fit their own aesthetic preferences and religious orientation, they created something new and peculiarly Turkish. A century later, Japanese potters at Arita would do the same thing, transforming Chinese porcelain into the rich and particularly Japanese beauties of *Nabeshima* and *Kakiemon*. In another century, beautiful works from China, Turkey, and Japan would inspire a ceramic revolution in Europe. And that revolution would prove to be essential to the industrial revolution that took place in eighteenth-century England but was foreshadowed in medieval China.

The excellence of the product prompted adoption. The slowness of distribution provoked adaptation, stimulating local creativity. Through recreation, the foreign was rendered familiar. It came to fit the communicative style of the local environment.

Religion is the great example of this simultaneously globalizing and localizing dynamic. Spiritual messages moved, just as utilitarian and aesthetic messages moved in the days of slow distribution. The spiritual is as essential to the human as the useful and beautiful.

Buddhism arose out of Hinduism, and during its movement north and east over difficult terrain, it was adjusted and readjusted to fit the spiritual needs of China and Japan. Christianity arose out of Judaism and spread through the infrastructure of the Roman Empire, merging on its journey with the elder faiths into a religion fit to Europe. Islam, the last revelation, followed Judaism and Christianity, and it was carried west to Spain, south to Africa, and east to Indonesia. Buddhism, Christianity, and Islam: these great religions are no less totalizing and globalizing than the commercial and political forces that we think of as peculiarly new. They employed complex technologies of production — writing and architecture and art—to move their spiritual messages, but their technologies of distribution were slow. No one of the religions ascended into complete dominance, and all were subtly adjusted to fit the local culture. Slow distribution permitted the development of internal differences, and it permitted synthetic actions across doctrinal lines as mystics in Asia sought spiritual oneness by combining Christian, Buddhist, and Islamic ideas into a religion of love.

In the old mix, then, the inherent excellence of useful, beautiful, and spiritual things brought cross-cultural connections, while the slowness of distribution stimulated internal development. That is, I am convinced, the best state for human affairs. True isolation is rare in the ethnological record. The virtue of isolation is that people left to their own devices will learn to exploit their environment to the fullest extent. But, deprived of knowledge about solutions to general problems developed in other places, they can do no more than perfect their imperfections. New ideas can be liberating, but if they come in sudden abundance, they can overwhelm the local culture, destroying creation and communication. Human needs are best served when new ideas are available, but people have the time to adjust these ideas to fit their own traditions and circumstances, converting the messages they receive into messages that can be sent, creating communications that invite the connections upon which quality in human life depends.

The change in our time is not a matter of an increase in the quality of communication. Communication is richest and most complete when people meet and talk as they have for millennia. Nor is it an increase in the quality of production. Once writing had developed out of speech, once porcelain had developed out of pottery, once religion had been materialized in the world's greatest buildings—the Haghia Sophia, Chartres Cathedral, the Selimiye at Edirne, the Taj Mahal, the Todai-ji at Nara—we had reached the pinnacle of creation. What is new is the speed of technologies of distribution. These technologies carry messages farther and quicker. They advance communication, without question, but they destroy more than they create.

A comparison is in order. The military historian John Keegan points out that medical progress has increased our capacity to save the lives of wounded soldiers, but, he argues, developments in medicine have not kept pace with developments in weaponry. Despite medical progress, soldiers are more likely to die. War, he says correctly, must stop. In the realm of communication, as technologies of distribution have progressed, international connections have strengthened, but not so swiftly as local connections—the associations founded

on direct contact and intimate cultural arrangements—have weakened. On balance, communication is in decline.

With the novel as the example, I argued that long distance communication requires a complexity of message that enriches the role of the sender, but restricts the role of the receiver. With porcelain as the example, I argued that when the complex message is distributed slowly and unsteadily, the receiver becomes the creator of new things. But when a complex message is distributed with great speed and in superabundant quantity, the receiver becomes no more than a consumer. Options for creation and communication decay. The receiver's creative act is reduced to the making of selections. With speed, the process called communication transforms into a process of domination. If communication is an exchange that brings connection, this is not communication. A complex message—a Hollywood film, say—is sent, but the receiver cannot respond with a counter message, and it becomes difficult—not impossible, but increasingly difficult—to rebuild the message into a new creation that embodies the creator's own values, and through which the receiver, now become a creator, can communicate with like-minded others.

Let us follow the evolution of American popular music. Once, every community had its own musicians. They learned from the community's elders, and they got new ideas from itinerant processionals and from cheaply printed song books. Their musical tradition existed in a state of steady change. As technologies developed, agents came into the countryside and recorded particularly talented musicians. Their performances, radically reduced in length to fit the limitations of the machinery, were then distributed by trucks on paved roads and by the radio over the airwaves. Hearing the best musicians from other places, local musicians were inspired to new heights of technical virtuosity. Then as commercial potential was realized, as phonographs and radios became common, local traditions were eclipsed and synthesized into a small number of general ethnic styles. Homemade music continued, but it grew increasingly homogeneous through the imitation of recordings, and traditional music in the United States consolidated into two master styles of popular music: country and western and rhythm and blues. Through complicated technologies of production and distribution, working class white and black people communicated with themselves, while their recordings, available generally in the marketplace, enabled the synthesis of rock and roll. Popular music unified in the creative moment of Elvis Presley, Bob Dylan, and the Beatles, and then its commercial success brought simplification. When traditional music belonged to little communities, it was diverse in style and message. Old songs brought forth the deepest issues that trouble the mind, stir the heart, and touch the soul. When popular music was reformulated in the studio for mass distribution, it reached for the widest possible acceptance. It became dominated by brief, slick performances in a single style with a single topic: the erratic, erotic relationship of boys and girls.

Since, as James Agee said, America will sell anything that sells, popular music—the acid rock of the sixties, the rap of today—has enfolded dangerous messages, and some flickers of stylistic variety remain in the music designed for working class people, but there is no question that, with the elaboration of technology, a single style and a single trite message

became dominant, and there is no question that thousands of local traditions have been obliterated in the process. National and international connections increase. American popular music can be heard everywhere. At the same time, local traditions have been crushed, not killed utterly, but driven into the cracks and the margins. On balance, in the United States, musical communication has declined in variety and quality with the progress of technologies of distribution.

Complexity in technologies of production serves utilitarian, aesthetic, and spiritual needs. Complexity in distributional technologies serve the needs of commerce and power. In the old colonialism, powerful states extracted the wealth of the defenseless directly. The Spanish took the silver of Latin America. The British took the people of Africa and made them slaves. In the new colonialism, powerful states strive to turn the defenseless into consumers, so that their wealth can be extracted indirectly and legally. Ships and firearms were the tools of the old colonialism. Films and televisions and computers are the tools of the new colonialism. If that seems extreme, it is exactly what an intellectual, a citizen of the poor nation of Bangladesh, told me: the new technology is the new colonialism. Struggling to catch up, to stay in touch, poor nations must purchase extraordinarily expensive machines, sending rare cash away to the wealthy nations that manufacture the apparatus. The poor country remains poor and increases in dependency, declining in power.

The technology of production is so complex, the technology of distribution is so quick, that films for working class people, televisions for middle class people, and computers for the elite, while seeming to be devices for communication, seem even more to be devices of a neocolonial power in the process of consolidation.

Now let us turn to the future, as I am supposed to do. A grim picture is easily imagined. We might look ahead to see people sitting in isolation, watching machinery and contriving a view of the world out of the barrage of repetitive messages that descend upon them. Simplified brutally to reach the widest possible audience, those messages will be advertisements interrupted by flashes of violence and sex. Watching large and technically advanced televisions, people will be taught that no sum of money is sufficient, that no amount of cash will meet their need to buy commodities that they do not need. Watching television, titillated by violence, children will steal technically advanced firearms to murder their classmates. Their parents, watching too, will come to think of politics as a realm, not of competitive ideology, but of sex scandals. When they turn to talk, as people will, their conversations, once enriched with scriptural references that raised the greatest of all philosophical issues, will be restricted to gossip about celebrities and fantasy folk from sitcoms and soap operas.

Of course, things will not be so bad. But one option for the future will be compliance, an acquiescence to the dominion of the mass media. A second will be resistance. Since the abundance and redundancy of the information coming through the machinery will not allow a gradual and critical response that could lead to creative synthesis, people will either accept the role of consumer or reject it, turning the machinery off and turning away from progress in a spirit of revitalization.

I have watched electricity and then televisions arrive in different rural communities, so I

know that the television can stimulate different responses. Some become embarrassed by the backwardness of their own culture, and they reject it to embrace the fantasies sent to them by people who want their money. Others, contrasting what they see on the television with what they know, derive a positive evaluation of their own culture. The television shows them dreadful alternatives—godless people drowning in greed, families rent asunder —and they become determined to hold firmly to their own way of life.

A simple view of the past will give us a simple view of the future. If we reduce history to the narrow narrative of progress, we will look around us for signs of change, and then look ahead to the triumph of the new technology, and with it the triumph of modernization. We collect examples of individualist behavior, secular order, and international connection, unify them under the name of modernization, and compose a history that contains one view of the future. But a subtler understanding of history, and a more accurate picture of contemporary life, would alert us to the great global counterforce of revitalization. In revitalization, people look backward to look forward. They work against modernization through affirmation of the communal, the sacred, and the local.

England modernized first, and the English first saw the limitations of modernity. English capitalists built the mills, English workers burned them to the ground, and English theorists imagined a future of freedom from industrial tyranny.

Japan has been a world leader of revitalization. After the Tokugawa period, when distribution was intentionally retarded and native creativity flowered magnificently, the black ships came. Within a generation, intellectuals began the resistance to westernization. Advanced by new contact, but tempered by the counterforce of revitalization, Japanese culture developed a new pattern for the world. Japanese people participated in international progress and international violence, but they renewed appreciation for their own art and culture, and they remained Japanese. Other modern nations—Sweden, say, or Turkey—seem to have achieved a comparable dynamic balance. Poorer countries have fewer choices. They can comply, becoming consumers of the culture of the new colonialism, or they can resist, searching their own pasts for ways to create a future that suits them. The desperation of that effort is exhibited painfully in contemporary Afghanistan.

One option for the future is compliance. We can become individuals who consume the messages relayed by the swift technology of distribution. Another is rejection. We can construct culture out of a dream of the past. The healthy state is one in which there is so much argument against the modernizing mass media that swift distribution is countered by a valorization of native tradition. Through argument we might artificially restore the era of slow distribution, fostering local revival, and producing a dialectic of opportunity within which people could shape for themselves decent and fulfilling lives.

The hope is that young people raised with the new technology will not be so smitten with it as their elders were. They will not be reduced to acceptance of the small range of ideas that the masters of capital find profitable. The machine will do their bidding, and perhaps they will be able to make it accept and send messages as rich and resonant as they were in the days of slow distribution. They have already learned to make the machinery serve their

intimate interests by chatting on the internet. Their act seems new, for connections are instantaneous, but they have been instantaneous since the arrival of the telephone. The telephone, my children argue, is expensive, while e-mail is not. Their argument reveals the obliviousness of privilege, for the computer they use and the infrastructure it requires are so expensive that few of the world's people can participate in the wide, shallow process of globalization.

The great beneficiaries of globalization are the manufacturers of the machinery, the masters of the technology, the richest men in the world. Banks and big businesses benefit, too, as they widen their neocolonial stretch. But benefit also comes to individuals who wish to stay in touch with people in distant places. They are chatting now, using very expensive equipment to do something that their paleolithic ancestors did better when they sat around the fire in the cave and spoke jokes and gossip. Communicating through machines, people make exchanges that bring connection, but when they speak of their evanescent networks as virtual communities, they are befuddled by one of the metaphors that make the new technology seem familiar while obscuring its difference. Communication accomplishes its end in the creation of community. Communities are not fragile interest groups. They are dedicated assemblies of people who see their destinies as interlinked, who can be counted on to help one another in times of need, despite differences of interest, opinion, and affection. The one whose community is not real but virtual is one who is not really in connection, but one who is alone, at last, and vulnerable. The gain is in electronic connection to unknown others. The loss is in the local connections that produce sensations of security, the confidence necessary to greatness.

While we speak with boundless enthusiasm about the vast potential of the new technology, I wonder why we do not stop to ponder its actual achievements. More information, more connections—to what end? When the telephone was new, Lady Gregory noted the way in which it interrupted the slow trains of thought necessary to creativity. She said that we will master the telephone, or it will master us, destroying the capacity to create great things. If we do not control the machine, she said, we will have no people in the future able to build a body of work as important as that of George Bernard Shaw. Shaw was no Shakespeare. The greatest English poet lived in a time of slow distribution. People as talented as Shakespeare live today. They seem to be advantaged by technology, but they produce nothing to match *Hamlet* or *Lear*, old plays based on old stories.

While we join in enthusiasm over technology, it should be chastening to recall that the world's greatest verbal communications were produced, not in the age of the computer, or even the printing press, but in the days of artful speech and tedious manuscripts, of epics and scripture. I mean the *Mahabharata*, the *Iliad*, and the *Divine Comedy*; I mean the Bible and the Koran and the Dhammapada.

At question is whether the people who are young today will be able to master the machinery. Can it do more than send advertisements and transmit chat? Can it accommodate messages as useful as agriculture, as beautiful as porcelain, as deep as Rumi's *Masnavi*? If so, the new global order could be as welcoming to the human spirit as the globalizing

orders created in the past.

The optimist who lives in the dreamworld of the unknowable future sees the new technology as a means to fulfill human potential. The pessimist who lives in the dreamworld of a vanished past sees the new technology as no more than the apparatus of neocolonial oppression. The one who lives in the immediate world understands that information in great quantity is no substitute for creative imagination, that the speed of transmission is no substitute for the richness of significance, that the multiplicity of connection is no substitute for the depth of connection.

In the future, some will comply and collapse, some will resist, and some—it is to be hoped—will learn what the machinery can do and what it cannot do, and they will use the new technology deftly to craft messages that matter, that supply people with useful, beautiful, and spiritual ideas to use while they shape their own thought and their own moral associations. And others—millions of others—will remain as they are today: beyond the reach of globalization, absorbed in their work and in the conversations that happen when old friends meet on the road.

Someone had to say it, so I have. In the next century, most communication will be as it has always been: a matter of direct, face-to-face conversation. Information will pile up in unassimilatable quantity and connections will ramify. Communication will decline — but slowly, because people are people.